

那珂かぼちゃ

ぼくは、いらいらした気持ちで夕食のテーブルについた。

今日は、サッカークラブのレギュラー選手せんしゅ発表の日だった。コーチが発表したレギュラー選手の中に、ぼくの名前はなかった。四年生になれば、いろいろな大会に参加できるようにするため、友だちのほとんどが、この日を目指してがんばっていた。ぼくは、このままサッカーを続けるのが、いやになってしまった。

テーブルには、肉じゃがとかぼちゃの煮物にものがならんでいた。

「おばあちゃんの畑でとれた、今年はじめてできた那



珂かぼちゃよ。」

お母さんはそう言うのと、すっと、かぼちゃの煮物をぼくの前に差し出した。あまり食べなくなかったが、なやんでいることを知られなくなかったから、とりあえず、煮物を口にした。

「えっ、これいつもののかぼちゃとちがう。」

思わずつぶやいた。

それを聞いていたおばあちゃんが、横から口をはさんできた。

「当たり前さ。私が心を込めて作った那珂かぼちゃだもの。そんじよそこらのかぼちゃといっしょにされちゃこまるよ。」

おばあちゃんはおねをはってそう言うのと、うれしそうにぼくの方を見た。そして、こう続けた。

「お前、今日学校で何かあったのかい。少し、元気ないよ。」

ぼくはあわてて、まだ口の中にのこっていた煮物を飲みこむと、おばあちゃんの質問しつもんには答えず、こう聞き返した。



「おばあちゃんは、どうしても今でもこのかぼちやを作り続けているの。たいへんな畑仕事なんかしないで、家で好きなことをしたり、のんびりしたりすればいいのに。」
ぼくは、ついおばあちゃんを問いつめるように言った自分の言葉にびっくりしていた。思わず目をそらしかけたぼくを、おばあちゃんはちよっとの間見つめると、にっこり笑って、こんな話をはじめた。

「私が畑仕事をはじめたのは、もう何十年も前のことだよ。そのころは、家族が生きるためにはたらいたよ。畑の作物を売って、お金をかせいで…。おじいさんといっしょにひっしではたらいたよ。でも、今はちが



うね。理由は二つ。一つは、何よりも畑仕事が好きだからだよ。たねをまき、芽を育て、病気から守り、一生けん命育てた作物がおいしく育っていくのを見るのが、何よりも好きなのさ。」

そう言って、おばあちゃんは、目の前の那珂かぼちゃの煮物を、一切れ口に入れると、とてもおいしそうに目を細めた。

「じゃあ、もう一つの理由は何。どうして今でも続けていられるの。」

身を乗り出して聞くぼくに、おばあちゃんは、にっこりとほほえんだ。

「それは、自分で考えてみなさい。お前も、何か続けているものがあるだろう。そのことを思いうかべて、考えてみるといいよ。」

ぼくは、おばあちゃんその言葉にはっとした。おばあちゃんを見た。おばあちゃんは、あいかわらずわらっていた。

ぼくは、答えをさがすように、あらためてかぼちゃの煮物を見つめると、もう一切れをつまみ上げ、口に放り込んだ。

那珂かぼちゃ

有機質ゆうきしつを使った土作りで、徹底てつていした完熟かんじゅくによる良品作りを目指し、那珂市でつくられた「みやこかぼちゃ」です。那珂市ブランドにも指定ししていされています。